

『大日経』『住心品』における心品転昇について

研究生 伊藤 真弘

1、研究主旨

「住心品」における心品転昇について、「住心品」に説かれる思想から、心品転昇と関わりのある幾つかの説示内容を、包括的に考察し、世間心から、初発心、出世間心、そして、密教へと至る流れをまとめていこうと考えた。

2、「住心品」の心品転昇の構造

2-1 世間心

まず、世間心について、九句の発問に対する如来の答説の偈中に、

①「心は百六十をはなれて／＼菩提そのものために
「生ずるのであつて」／＼

「大功德によって生ずる真髓であり／＼菩提を生ずる
ことを出生するものである」／＼

②「供養と行によって成就されたものである故に／＼菩
提のために最初に求めるものである」^①／＼

(L:181b4-182a1)

とある。「心は百六十を離れ、菩提そのもののために」と言われており、②では、チベット訳で「菩提の為に最初に求めるもの」、とされ、漢訳では初発心（大正蔵18巻、2上）とあり、更に「住心品」中には、

このように、1、2、3、4、5、と2をかけるならば、有情界の心は百六十である。三劫を以て超えんと、出世間心が生じるのである。(L:186a6-a7)

とある。以上から、世間の心としての六十心、或いは百六十心を、三劫を以て越えて出世間心が生じる。この事をもって初発心とする事が言えるのではないか、ということが推察出来る。

2-2 出世間心

次にその出世間心を越える次第を見ていこうと思う。まずは以下の経文を取り挙げる。

秘密主よ、そこで、出世間心に住する者達も又、蘊等に対して存在するという知恵が生じるのである。蘊等に対して貪欲を離れることが生じるその時、「蘊等は」泡と水沫と幻と陽炎と「芭蕉と」等しいと、「思
い、蘊等に対する貪欲を」滅することによって、解脱
するであらう。(L:186a7-b2)

まず、蘊等とあるから、ここでは、初期仏教（声聞乗・縁覚乗）を指すものと考えられる。あらゆる存在は、幻等の比喩のように、自性はない。あらゆる存在は無我であるという「人無我」を覚る、というのがこの段階であると言う事が出来るのではないか。まず、暫定的に、この出世間心を、出世間心の一番目とする。出世間心の一番目を越えた次に説示されている出世間心について、以下の経文を提示する。

秘密主よ、更に又、大乘によって歩み他の縁に依らない者達において、法に対して無我の心が生じるのである。それが何故かと言えは、このように彼らは前行を修して蘊の住所を滅するならば、自性を知る故に、幻と陽炎と影と響と旋火輪と乾闥婆城のようなものであるとの想いが生じるのである。秘密主よ、その故に、彼らの心が自在となる故に、法無我性もまた捨てるのである。自心は本より不生なるものだからである。

(L:186b7~187a2)

冒頭に「大乘によって歩み」とあるので、ここでは、大乘を示している事は明らかであると思われる。そして、幻等を観察して法に対して無我の心が生じる（法無我）と説かれている。更に、法無我性も捨て去って自心が本より不生であることを覚るとしている。この本不生を覚るまでを、出世間心の二番目とする。

2—3密教（真言門）へ入る段階

次に、出世間心の二番目を越える次第についての経文を以下に示す。

秘密主よ、さらに又、真言門より菩薩行を修する菩薩で（中略）極無自性心が生じるのである。秘密主よ、この心こそが、最初の菩提心であると、諸々の勝者達によって説き給われたのである。(L:187a7~b3)

出世間心の二番目を越える段階で、冒頭に真言門より云々としている。そのため、ここで密教の段階に入る事が推測

できるものと考えられる。この文中にあるように、極無自性心が生じた、この心が最初の菩提心であると考えることが出来る。よって、極無自性心が生じた、又、最初の菩提心を得た段階こそが、出世間心の二番目を超えた、密教の段階とすることができると考えられる。

3、おわりに

今回整理した心品転昇の構造を基にして、「住心品」に説かれる「如実知自心」の解釈、菩提心思想について研究を進めていきたい。また、注釈書では、『十地』について言及されているので、『大日経』と『十地』との関係についても、研究を進めていきたい。

(1) ラサ版 (L.) [Case:No.86 経典番号: No.402]、北京版 (P.) [大谷目録 No.126]、デルゲ版 (D.) [東北目録 No.194]